

いきなり戦争ネタでスタートしてしまったので、パラオが大の親日的であるところとか、列強に翻弄された歴史とか、言葉ではなかなか表せない海のきれいさに焦点を当ててみたい。

## 国旗について

バングラディッシュだったかどこかの国のデザインが、日の丸と似ているというのは知っていたが、パラオの国旗も日の丸に似ているって事を知ったのは、恥ずかしながらこの国に来てからだった。



1981年の憲法発布の際に、一般公募より選ばれたものらしい。

その意味は、『青い海と満月』だそうだ。そしてそのモデルは、日の丸という話だ。

本当かどうか知らないけれど、さらにこんなストーリーを聞いた。

### 満月が少し左によっている理由

日の丸をモデルに頂いたものの、満月が旗の真ん中ではあまりに似すぎて日本に失礼だから。

### 満月である理由

月は太陽があればこそ輝く。日本から光を受けてパラオは月のように輝いているから。

何とも泣かせる話なのである。

戦前の、日本による占領や統治、と聞くとすぐさま朝鮮半島を連想し、バリバリの反日感情というイメージが拭い切れないが、実は台湾と同じようにパラオの場合も、人々は“日本には正当な統治権があった”という様に思っている。そして当時、インフラや教育に力を注いでくれた日本に対し、特に親近感を持っているようなのだ(因みにアメリカもそれなりに尊敬されている。ただ韓国や台湾人に対しては、何だか見下したようなところがある)。

## 歴史について

パラオに行く事を決めてから、パラオって“国”だったんだと知った。

タヒチって国はあるけど、パラオってミクロネシア連邦の1つの島だろ、なんて認識だったのである(実際にはタヒチって国はなく、パラオが国でびっくり)。

少し詳しくパラオの歴史について

### スペイン統治時代

19世紀後半まで、パラオは複数の部族によりそれぞれ統治されていた。

しかし、ヨーロッパとの交易が始まると、持ち込まれた鉄砲と天然痘によってパラオの人口は10分の1まで激減してしまったそうだ。

そしてスペインはある部族と手を結びパラオの内戦を収め、さらに1885年に領有権を主張する。

他の国と同じように、パラオでも宣教師がキリスト教の布教を開始し教会や学校などを建設するが、たいした植民地政策を執らなかった。

結果として現在のパラオでは、スペインの影響は私が知る限り皆無である。

## ドイツ統治時代

キューバの領有権にからんで、1898年、スペインはアメリカと戦争に(米西戦争)。結果としてスペインは敗北。グアムをアメリカに取られ、パラオはドイツに売却された。

ドイツは、パラオのリン鉱石やボーキサイト  
の採掘など産業開発に力を入れた。

パラオで一番大きな島、バベルダオブ島の  
桟橋には、リン鉱石の積み出し基地の跡が  
残っている。

そしてその先には、トロッコ列車の線路が  
ジャングルの中を走っている。所々ひん曲  
がっているが、修理すれば今も使えそうな  
感じだった。



パラオ最大の島、バベルダオブ島の桟橋に残るリン鉱石積み出し基地の跡。ドイツと日本の時代に採掘。

当時、ドイツ人は統治する人間を置くだけ  
で移住しなかった為、現在のパラオにドイツの影響はあまり見られない。

余談ながら、中国/チンタオにはビールの製法を教え込んだのに、パラオでは作らなかった  
ようだ。結果として、現在もパラオでは、基本的にビールはすべて輸入である。

メジャーなのは、バドワイザーとアサヒだったりする(実は、ごく一部に地ビールがあるが、  
日本の地ビールと同じ味がした。つまりあまり美味くない。また現地の人は飲まないみたい)。

## 日本統治時代

1914年、第1次世界大戦にて日本がドイツに宣戦を布告。日本軍はミクロネシアを占領。  
パラオは日本海軍の重要拠点となる。

1918年、戦争は終了し、国際連盟によってパラオは戦勝国の1つである日本の委任統治  
領とされた。

1922年、日本政府はミクロネシア日本領全体を統治する南洋庁をパラオに設置する。  
そして移住者を多数パラオに送り込む植民地政策をとった。

結果、2万5千人の日本人がパラオで暮らす様になる(当時のパラオ人よりも多く、また現  
在のパラオの人口よりも多い)。

そして鉱業、水産業、農業などを振興、また医療施設、学校などを建設した。

また日本文化や日本語を学習させパラオ人を日本人として教育した。これは当時のパラオで  
は、凄まじいほどの厳しい教育だった為、パラオ人の間で批判も数多くあったらしいが、例  
に漏れず、戦後その教育が如何に素晴らしいものだったかが再認識されたようだ。

現在もそのままパラオ語として定着した日本語がたくさんある。

## アメリカ統治時代

1945年、パラオは国連によってアメリカに統治委託となった。

アメリカ人は、パラオ人に日本の教育や文化が相当浸透している事に驚き、同時に危惧する。そして日本統治時代に浸透した日本文化の影響を徹底的に消すために、日本的なものを破壊すると共に、英語とアメリカ式ライフスタイルの導入を推進した。

もはや、経済的にアメリカに頼る道しか残されていないパラオでは、だんだんとアメリカ化が進行していく。

現在パラオでは、英語が通じる事が多い。そしてパラオで最も盛んなスポーツは野球もしくはソフトボールである。その次がバスケットボールで、サッカーやテニスは一度も目にしなかった。

しかし、悪い面としては、何だか使い捨て文化になってしまっている。大量輸入で大量消費。その内、ゴミ問題が深刻になる事は間違い無いと思う。

### 独立国時代(現在)

パラオ人はアメリカ信託統治よりも独立国となることを望み、1981年に共和国としての独自憲法を発布。

1994年、米国との間の自由連合盟約が発効、独立。

観光関連収入とアメリカからの財政支援、日本のODAが国家経済を支えている。

### 物価について

実に高いのである。日本と変わらないものが多い。

例を挙げると...

- ・ 宿： 安宿といわれるところでも、多くは30~40ドルもする。
- ・ タクシー： 車はぼろいが、日本の半分程度の値段(世界的にはとても高い)。
- ・ ハンバーガー：1個2.75ドル。でもマックなんかより断然美味かったけど。
- ・ カツどん： 7ドル。もちろん日本で食べる方が断然美味い。
- ・ カップ麺： 1ドル。日本の方が断然美味い。でもメーカーは日清なんだけど。
- ・ 水(500ml)：1ドル。量が増えるとそれなりに安くなるけど。
- ・ ダイビング(2本)：100ドル。もうふざけんなよって感じ。さらに器材レンタル代は別。
- ・ ダイビング税金：州によって15~20ドル(15日間有効)。
- ・ 居酒屋： 30~40ドル。日本より高いかも。
- ・ 和食： 居酒屋と同じで高い。定食12ドルなど。刺し身も高いぜ。
- ・ ワイン： 一番安いもので10ドル。でも全く美味くないカリフォルニア産。
- ・ 野菜類： いろいろだが、日本と変わらないかも。ほとんどが輸入らしい。
- ・ 肉類： 日本よりは少し安い程度。全て輸入品。
- ・ 魚類： さすがに日本より安いけど、薫製などは結構高い。
- ・ 衣類： これもいろいろだが、日本と変わらないかも。
- ・ 雑貨： 圧倒的に高い。求む、百円ショップ。
- ・ 空港使用料：20ドル

一方、安く感じたのは...

- ・ 缶ビール： 1 ドル。これだけが救い！
- ・ 米： カリフォルニア米。20 キロで 20 ドル。日本の 4 分の 1。
- ・ 散髪： 5 ドル。(世界的には普通かも)。
- ・ 醤油(600ml)： 1.75 ドル。(日本からの輸入だが、世界的には安い)。
- ・ 電話： 国内はただ！

と、こんな感じなのである。総じて高い。

そもそも航空券だって高いのだ。私の場合、先日行った南米のマイレージが溜まっていたのでそれを適用したが、東京から来た夫婦によると、航空券とホテルだけで、何と一人 20 万円だそうです。夕食をホテルで食べると(一人 30 ドル)、4 泊 6 日夫婦で 60 万円コースになってしまうそうです。さらにその夫婦曰く、グアム経由だったらしいのだが、よっぽどグアムにしようかと思ったと。何でもパラオの 3 分の 1 の値段で済んでしまうらしい。

しかし、何でこんなに物価が高くなるんだろうと不思議でしょうがない。

そもそも観光産業って言ったって、それほど大きなビジネスではないはずだ。数にして年間 6 万人程度だ。

6 万人が 10 万円ずつ落としても、60 億円にしかならない。観光客が食べる食料は輸入品だし、ダイビングボートの燃料も輸入品。おまけに、日本人労働者は観光産業を中心に 250 人もいて、給与もそれなり。だから結局、パラオ人の懐に入る金はごくわずかなはず。

観光産業の他には漁業活動があるが、これは主として自家消費及び国内市場向けだ。

う~ん、不思議だ。

## お金の話

ついでにお金の話。

日本出発の日の市場レート(TTM レート)は、朝のニュースによると 1 ドル=107 円だった。だからドルは 108 円付近で買えるはずだ(TTS レートという。正確には“対顧客電信売相場”で、現物を伴わない取引)。

成田空港ではレートが悪いとよく聞かすが、チェックインカウンターのフロアーの両替所では 109.5 円だった。かなりの長い列ができていてやけに待たせるし、レートも悪く全く割が合わない。

そして出国手続きを終えて、ゲート近くの両替所で確認すると、今度はさらに高くなり 110.2 円であった。

1 ドルが 360 円の時代にも TTM と TTS の差、つまり銀行の手数料は 1 円だった。しかし円高になっても銀行は手数料 1 円を守っているのだから、実質的に為替手数料は 3~4 倍に上がっている。にもかかわらず、さらに TTS に 2 円もしくは 2%近くも上乗せするとは、さすが銀行はあくどいことをするものだ。

そんな事を思いながら中継地のグアムに着いて空港の両替所で確認すると、なんと 1 ドル=119 円である(注) 109 円じゃない! )。

日本人が来ないと成り立たない島のくせに、“日本人をカモにするアメリカ”という感じがして、どうも気分が悪くなった。

オーストラリアの両替もひどかったが、やはりアメリカえげつない。

で、パラオに到着。銀行のレートが気になったが、さすがアメリカが支配していただけあって、パラオはカードが使えるのであった。結局、手持ちのドルで間に合っしまい、銀行には一度も行かなかった。因みにカード会社の決済レートは比較的良い。

## パラオの宿

空港はとても小さい。それもそのはず、1日に1便しか到着しない事が多いらしい。

飛行機を降りると、生暖かい空気が体を包むが、ジャカルタやシンガポール、またはタイとも違う、何とも澄んだ空気をを感じる。

イミグレと税関を過ぎるとレンタカーのカウンターが並んでいる。そして食堂が2軒と数軒のお土産屋。

公衆電話が見当たらない。パラオは全土で(と言っても小さい国だが)国内電話が無料だからだろうか。

そこで1軒の食堂で電話を貸してくれと頼むと、女の子が快く貸してくれた。そして宿の相談にも乗ってくれた。空港に迎えに来ている各ホテルのスタッフに金額を確認してくれる。

「おおっ、何てパラオは素晴らしいんだ」

と思ったが、どこも30~40ドルでちっとも安くない。

「何てパラオは高いんだ」

結局ガイドブックでWater Worldという宿に電話する。値段は15ドルプラス税金10%で16.5ドルである。

どうやら、ここがパラオで一番安く、その次になると30ドルという事だった。

ここのオーナーは、Kwakさん。韓国人次だ。15年前に野球を教えにパラオに来たのが移住のきっかけだと言う。奥さんはパラオ人次だ。

何となく、彼とはとても馬が合い仲良しになった。

パラオで一番安い割には、この宿は素敵である。一階は韓国レストランになっていて、テラスは海にせり出したように出来ている。青い海が実にきれいだ。

テラスの下には、多くの魚のほか、カメ、エイ、タコなども来る。

夜は夜で、テラス下の海中がライトアップされていて、小魚が飛び跳ねていて見ていて飽きない。パラオの外出はとても高く、この韓国料理も安くはないので、私は結局は一度も食べなかったが、



このテラスで釣りをしてみたが、一向に掛からず。地元の人にはルアーでタコを釣り上げていた。すかさず韓国料理に...

外でお弁当とビールを買って来て、何度もこのテラスで食事を取った。

## ダウントウン

宿の周辺には多少のお店があるのだが、大きな店舗はない。

そこで 2~3 キロ離れたダウントウンに歩いて行ってみる。実は歩いている奴なんかほとんどいないほど暑い。

まずは貸し自転車屋を目指す。何でも日本人が経営しているらしい。その店舗には、お土産屋さんも併設されている。こちらは日本の女性が、店舗をシェアして経営しているのだそうだ。

昔、『海の向こうで暮らしてみれば』という番組があったが、意外なところで、多くの日本人が働いているものだ(でも、両方とも、それなりに高く、貧乏旅行者はお呼びじゃない)。

TWCT というパラオ最大の大型スーパーへ行く。

大型と言っても小型のダイエーみたいなもんだ。同じ商品がずらっと並んでいる。一昔前のロシアみたい。

ここパラオでは、ほとんどが輸入品である。アメリカ、日本、オーストラリア、フィリピンなどから、生活に必要なものを中心に輸入されている。

そんな訳で、日本製品は実によく揃っている。醤油はキッコマンだけでなく、ヤマサまであった。

次に床屋へ行く。カットするのはフィリピン人。妙におかまっぼい。カットしながら、微妙にいろんなところを触ってくる。

後で人に聞くと、どうも出稼ぎに来ているフィリピン人の男は、おかまが多いらしい。

因みにこの床屋さん、物価の高いパラオにしては安く 5 ドルである。安い労働力のたまものだ。

夜、居酒屋に行ってみる。ダイバーに人気が高い、通称ナポレオンという魚のしゃぶしゃぶがあるというので頼んでみた。

ダイビングの教科書には、『ダイバーは海の環境の使者である』みたいな事が書いてある。つまり魚も珊瑚にも極力影響を与えずに、逆に環境を守る側にいる、という趣旨らしいのだが、岡に上がってこうして注文していたら一緒だなあ。

因みに値段の割に味は今一つである。

## 滝へ行こう

日系の旅行社が主催する滝を見るツアーに参加した。

ガイドは日本人である。パラオに来て 5 年。免許証の書き換えで一度日本に帰った事があるが、全く帰りたと思わないらしい。『アイラブパラオ』という事だった。

仕事場として、何故パラオを選んだかを聞いてみた。答えは 2 つ。

- ・治安が良い事。
- ・国が若く、国の体制が整っていく様を見たいという事。

現在のパラオは、戦後の日本に似ていて、これから法律も、インフラも産業も作られていく過程を見たいというのが彼の考え方だった。以前は沖縄でダイビングのインストラクターをしていたが、沖縄の冬が意外と寒い事と、ダイビングは肉体的に仕事がつい事から、他で違う職をさがしていたと。パラオに来るまでに2年間職を探したらしい。でも“国の体制が整う”という事が、その時の私にはあまりピンと来なかった。

しかし後日、JICA な人々の一人が、似たような事を語ってくれた。その方はパラオ国の役人として、廃棄物関連の仕事をしている。あまりに国の体制が整っておらず、その仕事も、これをやれ、あれをやれ、という押し付け事はほとんどなく、同時に責任もない。まるっきりボランティアと言う感じらしい。しかしだからこそいろいろな事、好きな事ができるという。そして小さな国であるがゆえに、やったことが目の前に形となって現れるので手応えがあって実に楽しいと。これが日本なら、もっと優秀な人はいっぱいいるだろうし、自分の成果など埋もれてしまって見えなくなるだろう、そんな風に言っていた。紛れも無く、これが国の体制を整えるって事だと感じた。

さて、本題に戻り、滝である。その滝は、バベルダオブ島にある。この島では、ところどころ道路工事が進んでいる。バベルダオブ島は、パラオ最大の島(グアム島の70%程度)なのだが、あまり開発が進んでいない。

パラオの南半分は隆起珊瑚質の大地だが、バベルダオブ島は、火山性の土地で、土壌は強い酸性らしい。それでも緑が隆々と茂っている。パラオは2年後を目標として、首都を現在のコロール島から、このバベルダオブ島に移すつもりらしい。その為に周回道路を作っているのだった。その資金は日本の援助だったりするのだが。

途中、急な斜面を流れる川の水溜まりで遊ぶ子供たちの姿があった。天真爛漫に遊んでいる。

パラオは時々、給水制限をする事がある。水道からの水を現地の人々は時々直接飲んでいるそうだが、あまり体に良くないらしい。基本的には雨水を飲むそうだ。こんな川があるなら、この一帯は水不足にはならないのだろうか。あまり高い山がないパラオにしてはめずらしく水量の豊富な川なのであった。



川の水溜まりで遊ぶ子供たち。あまりに暑いので、泳ぐだけでなく、温泉の様につかっていることもある様だ。

途中から川に入って歩く。腰の高さまで水が来て、ポケットのカメラと財布を持ってあるかざるを得ない。まさにジャングル探検。しかし背中リュックまで浸っていた事にうかつにも気付かなかった。中のタオル、トイレトペーパー、ノートなどがびしょり。



ミクロネシア最大級の滝、ガラスマオ。途中、腰までつかる川を歩いて到着する。

気を取り直し、さらに5分程歩くとよいよ滝だ。

さすがにイグアスの滝ほどではないが横に広がっているタイプのやつで、水のカーテンと言った感じ。昔は、乾季には枯れていた滝だそうだが、最近は年中、水があるという。これも地球温暖化の1つかもかもしれない。

## 海へ行こう

ミルキーウェイと呼ばれる場所に行く。小島に囲まれた場所を、パラオではマリン・レイクと呼ぶ事がある。パラオの数々の島々の間に、乳白色を帯びたエメラルドグリーンのマリン・レイクがある。波に削られてできた石灰石の泥が、何故かこのマリン・レイクに集まって来て堆積した場所で、海底は真っ白な泥で出来ている。



パラオの海は、ものすごい濃い青からこんなグリーンまでいろいろとてもきれい。この水深は5メートル程度

素潜りして海底をさらい、これを体に塗りたくると美泊・保湿効果があるという。

実際に、化粧品会社が、「パラオホワイトクレイ」という商品名で製品を出しているそう(1万円近くするらしい)。

## 湖へ行こう

ジェリーフィッシュレイクと呼ばれる湖に行く。上空から見ると、この湖は海とつながっていないが、しょっぱい。どうも水面下に海とつながっている個所があるらしい。ただ海の塩からさほどではない。海水と淡水が微妙に混じっている。

ここはパラオのメインスポットの1つである(私は、パラオでここが一番好きだ)。クラゲが無数にいるのだ。1982年に「ナショナル・ジオグラフィック」誌に紹介されて、世界中にその存在をしられ、パラオの一大名所になったところだ。

湖畔からシュノーケルで泳ぎ出す。しばらくすると、回りにぼつぼつとクラゲが現れ、そしてあっという間にクラゲの群れに突入する。四方八方クラゲだらけ。

このクラゲは刺さない為、海水パンツで OK なのだが、これほどいると、腕、足、おなかにプリンみたいなものが当たってくる。

多くは大人の拳くらいの大きさ。大きいものだとその倍くらいあって、半球状の笠の部分を手で広げると、ピザの S サイズくらいの円盤になる(本当は触ってはいけないのだが)。



もう見ていると眠くなるようなミステリアスな空間である。水がオレンジ色に見えるほど無数にいる。

普通のツアーだと、30分程度で見終わるのだが、私はここに3時間もいてしまった。疲れが抜けない現代人にお勧めの、癒しのスポットである。

### 海中へ行こう

パラオの海に潜ってみる。

透明度は、沖縄の海ほどではないが、魚の数と大物が多い事がパラオの特徴という話だ。

あるダイバーに言わせると、タヒチ、モルジブ、パラオの3ヶ所が世界の憧れの3大ダイビングスポットだそうだ。

今回も釣りをした。モンゴルで買った釣竿を使ったのだが、これまで一度も釣れた事が無い。これだけ魚がいれば、さすがに釣れるだろうと糸を垂らす。

ところが、元気一杯の魚は、簡単に糸を切って逃げてしまった。連敗記録更新中である。

つづく



これがパラオの海。特徴は、大物が多い事 数が多い事 だそう。この魚は20~30センチ程度の大きさ。